

もくじ	
▽大会案内	8
▽私の生理人類学	9
▽研究室紹介	10
▽研究満喫	11
▽学会動静	12
▽ from Editors	13

## 【大会案内】

### 第74回大会のご案内(第1報)

大会長 小林宏光  
(石川県立看護大学)

本年10月22, 23日に開催いたします第74回大会について第1回目のご案内をいたします。



## 1. 【重要】会場変更のお知らせ

昨年の学会総会等で74回大会会場は金沢市の石川県文教会館で開催するとお知らせしてきました。ところが10月23日に金沢市内で大規模なマラソン大会が開催されることになり、当初の会場

での開催は不可能となってしまう、会場を石川県七尾市和倉町の和倉温泉観光会館に変更することにしました。

和倉温泉は全国有数の温泉街で七尾湾に面した風光明媚な観光地です。本学会では大学内で大会を開催する機会が多いですが、今回は一風変わった会場となります。会場は和倉温泉総湯のすぐ近くですので、お昼休みにひと風呂浴びることも可能です。ぜひ多くのご参加をお願いいたします。

## 2. 大会の概要

特別講演(22日)は「ヒトにおける二足歩行の意義」と題して、石川県立看護大学前学長・日本人類学会元会長の木村賛先生にご講演をお願いしております。またシンポジウム1「遺伝学を通してヒトを理解する」(22日)および「看護学と生理人類学の接点」(23日)の2つのシンポジウムを企画しております。シンポジウム等、大会の詳細については今後随時大会HPでお知らせしていきます。

## 3. 交通および宿泊について

金沢駅から和倉温泉駅までは特急で1時間程度、会場の和倉温泉観光会館は和倉温泉駅から徒歩20分程度です。懇親会会場は宿守屋寿苑という観光旅館で、会場から徒歩10分程度です。先にも触れましたが、マラソン大会の影響で会期中は金沢市内の宿泊は非常に困難です。和倉周辺までは影響は少ないという予想ですが、念のため交通・宿泊先の確保は早めをお願いします。和倉には36年連続日本一で有名な加賀屋を始め豪華な観光旅館が多くありますが、簡便なビジネスホテルも会場近隣にあります。交通・宿泊関係の情報は大会HPや学会メール等で随時お知らせしていきます。

## 【私の生理人類学】

宮野道雄(大阪市立大学)

私が日本生理人類学会の会員になったのは1991年です。当時の大阪市立大学生生活科学部は学部再編を行っており、住居学科と被服学科が合併して生活環境学科が生まれることになりました。大阪市立大学へ赴任したのは1985年で、その頃から両学科合併の議論が盛んに行われていました。住居学科に着任する前には、工学分野で過去の地震被害調査資料に基づく入力地震動評価のテーマに取り組んでいました。

住居学科では専門科目として構造力学などの構造系科目の他、従来からの研究テーマであった地震防災を中心とした地域安全工学に加えて日常災害に関わる住居安全工学を担当し、講座は環境工学系の住居機構学講座に所属していました。環境工学は光や温熱・湿度、音などの環境要素と人の関わりを研究対象としますが、その中において私は災害時の人の行動や人的被害すなわち死亡や負傷の発生メカニズムを追究しており、人をターゲットにした研究を志向しておりました。

このように人を対象とした研究繋がりといった背景から当時、生活科学部に被服系教員としておられた綿貫茂喜先生との接点ができました。綿貫先生からの働きかけもあり、所属講座の教授であった中根芳一先生が日本生理人類学会の大会長をされることになったのをきっかけに、私も会員としてその運営を手伝うことになった次第です。日本生理人類学会の会員にさせていただいて感じたのは、上に述べたように、もともと工学分野でモノを対象に研究しており、生活科学分野に移行してから人の研究を始めたとはいえ、手法的にもかなり縁遠い存在であった私を、当時の会長であった佐藤方彦先生や副会長の菊池安行先生は暖かく迎え入れてくださり、様々な場面で細やかな心配りをしていただいたことです。また、若手の会員が多く、国内の研究発表会や国際会議など活動が非常に活発に行われていることが印象的でした。

日常生活事故に関わる研究は大阪市立大学に赴任してから開始したテーマで、初期は人口動態統計資料に基づく分析や住宅内事故の調査研究が主体でしたが、日本生理人類学会入会後は少しずつ生理指標を用いた実験的研究にも挑戦し始めました。すなわち、まずは平面床段差の視認性評価に

基づいて「つまずき」による転倒危険度を明らかにしようと思いました。当初は静止立位の状態の被験者のアイマークカメラによる視線の動きと重ねながら、段差部の寸法や輝度対比によって視認性がどのように変化するかについて高齢者と若者での比較を行いました。その後、この研究はビデオ映像を用いた三次元動作解析や重心動揺計、筋電計を用いた歩行動作を伴う動の実験へと発展しました。

また、生理人類学関連研究としては、地震時の人的被害危険度評価ツールとして、人体被災度計測用ダミーを開発しました。この研究では、生きた人間の生理指標を扱うものではありませんが、実験的手法で人的被害研究に取り組む視点を与えていただいたと考えています。さらにその後、心拍、血圧などを指標とした地震動が人に与える影響評価を行う実験へとつながりました。

この原稿を書いている最中に熊本地震が起きました。この地震の特徴のひとつは、震度7が立て続けに起き、余震活動が活発なことから被災者は車中泊を余儀なくされ、いわゆるエコノミークラス症候群などで震災関連死を多く発生していることです。日本生理人類学会から学んだ生理指標に基づく実験的研究手法で、このような自然災害における人的被害の軽減に関わる研究を今後も進めていければと考えています。

最後に、学会事業と私の関わりについて述べますと、中根先生の大会長のお手伝いから始まった事業参画でしたが、その後、ニューズレター発行事務局、その延長として新たな学会誌の形としての和文誌発行の協力、そして編集委員長として携わってきた約10年などがあげられます。また、この間20年間にわたって理事を拝命しましたが、



第46回大会(2001年)の様子

学会運営のノウハウを沢山学ぶことができました。さらに、2001年10月には入会後10年目にして第46回大会長を仰せつかり、多くの同僚教員や院生・学生のお陰で無事終了できたことは大変良い経験になりました。当時の写真を見ると、パワーポイントではなくオーバーヘッドプロジェクターが使われており昔日の感があります。



居住空間実験住宅（外観）

## 【研究室紹介】

### 福祉人間工学研究室

村木里志(九州大学)

福祉人間工学研究室は九州大学大学院芸術工学研究院デザイン人間科学部門生理人類学講座の一研究室です。福祉人間工学とは障がい者や発育・老化などの個性に起因する諸課題を人間工学的にアプローチする研究分野です。英語では *Ergonomics for all ages and abilities* と称しています。福祉人間工学という専門名は2003年に九州芸術工科大学(その年10月に九州大学と統合)に着任したときから用い始めました。その当時、福祉工学という専門名はありましたが、福祉人間工学という授業や研究室はインターネットで検索しても見当たりませんでした。つまり国内初の「福祉人間工学研究室」であります(もしかしたら、世界初かもしれません)。

研究室では「人にやさしいデザインを科学する」をモットーに主に2つのテーマに取り組んでいます。



研究室集合写真（2015年秋）



居住空間実験住宅（歩行動作解析の様子）

す。ひとつは老化や障害によって低下した運動機能を用具や生活環境の面から支援することを目指す人間工学的研究です。身体動作な面からのアプローチすることが多く、後述する実験施設にて実施しています。こちらのテーマでは産業界との共同研究や連携も積極的に進めています。もうひとつは高齢者、子どもや障がい者の運動機能維持・向上を応援するための研究です。こちらは体力や生活行動の面からのアプローチが中心です。例えば下肢の筋年齢や歩行能力を評価する新しい手法を開発したり、体力が衰えない生活環境・習慣を検討したりしています。フィールドで展開することも多く、地域のイベントに参加したり、研究室独自のイベントを開催したりして、当事者と直接触れ合いながら研究を進展させています。これらの取り組みは、当事者の生活や困っていることを理解する良い機会でもあり、前者のテーマの参考にしています。

最近では上記のテーマに加えて、高齢者のテクノロジーに対する適応能にも取り組んでいます(科学研究費挑戦的萌芽研究課題)。例えば、高齢社



会の諸問題の解決にアシスト機器や介護ロボットなどテクノロジーの活用が期待されています。その反面、人間とテクノロジーのインタラクションの問題から様々な課題が生じることが予想されます。将来起こり得る課題を想定し、生理人類学の面から基礎研究を進めています。

本研究室には、芸術工学部工業設計学科人間工学分野の4年生、芸術工学府デザイン人間科学コースの修士・博士課程学生(国際コース含む)およびポスドク、研究生が所属しています(例年15～20人)。留学生も多く、現在はマレーシア3名、インドネシア2名、タイ1名、台湾1名、ブラジル1名、中国1名の学生が学んでいます。また、修士・博士課程の学生は他大学からの進学者が多く、医療(看護、理学療法、作業療法)、工学、体育関係のバックグラウンドを持つ者が多く集まっています。

研究室では主に居住空間実験住宅を利用します。当施設はスペースが広く、給排水設備、床暖房なども整備され、キッチン、浴室、トイレ、階段、居室などの居住空間の模擬が可能です。また、歩行計測などにも対応します。装置類では特に身体運動関係の計測装置が充実し、モーションキャプチャシステム、超音波エコー装置、床反力、筋電図などの多用途テレメーター、圧分布計、呼吸代謝装置などが揃っています。

研究室の詳細は下記にて公開しています。是非お立ち寄り下さい。

WEB <http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~muraki/>

Facebook <https://www.facebook.com/murakilab>

## 【研究満喫】

### 言語認知からヒトの感性を考える

#### — 学位取得記 —

江頭優佳(九州大学)

2016年3月に九州大学大学院統合新領域学府の博士後期課程を修了し、感性学の学位を頂戴いたしました。日本生理人類学会の会員の皆様には度々学会発表の機会を頂き、ご助言を賜り誠に有難うございました。ここに学位取得記としてご報告いたします。

学位論文のタイトルは「湿度印象を意味するオ



学位授与式の様子 研究室の後輩と

ノマトペの認知過程に関する事象関連電位を用いた研究」です。オノマトペ(擬音語・擬態語)を豊富に持つことは日本語の特徴のひとつであり、日本人のコミュニケーションにオノマトペは欠かせません。オノマトペはしばしば直感的に理解しやすいと言われるますがその理由については十分に分かりません。そこで、何故直感的に理解しやすいのかの要因を知るためにオノマトペの認知過程の特徴を明らかにすることを大目的として研究を続けてきました。博士論文では湿度感に関連するオノマトペと理性語の認知処理の違い、湿潤環境がオノマトペの認知処理に及ぼす影響についての二点をメインテーマとしました。研究の結果、オノマトペと理性語の認知処理の最初の違いは単語の語形の違いを識別する段階で生じることが分かりました。加えて、認知処理への湿潤環境の影響はオノマトペのみに生じることが分かりました。具体的には、湿潤環境の中で環境と一致・不一致の環境評価語を聴取した時、オノマトペのみで環境との一致・不一致が事象関連電位に反映されました。従って、オノマトペは理性語よりもヒトの感覚器官からの情報との関連が強いことが分かりました。オノマトペはヒトの「その時生じている感覚情報」と関連して処理されることから、オノマトペの認知処理にはヒトの生理・心理特性の個人差が影響すると考えられます。今後は「ド



実験風景

ういうヒトが何を「じめじめ」と表現するか」といったオノマトペの意味に対する個人差に着目して研究を継続したいと考えています。

修士課程に入学した際は生理人類学どころか研究活動に対して完全に素人であった上、オノマトペをテーマにした先行研究が非常に少なかったため何から手をつけていいのか何も分からず、「分からなすぎて逆に怖くない」といった状態でした。そんな私を快く受け入れてくださり、学位取得まで導いてくださった綿貫茂喜教授にはどれだけ感謝しても足りません。また、学位審査の際には突然の指導教官の変更にも関わらず主査を快諾してくださり日頃からお気遣いいただいている樋口重和教授にも心よりお礼申し上げます。加えて審査をしてくださった森周司教授、金克奎准教授には大変ご多忙の折に論文への貴重なご助言を賜りどうも有難うございました。最後に、日本生理人類学会の会員の皆様には、学会に参加するたびに研究に対して貴重なご助言と激励を頂戴し、大変励みになり支えていただきました。重ねて御礼を申し上げます。まだまだ未熟で分からない事ばかりですが、今後の研究成果で生理人類学の発展に貢献できるよう邁進したいと思います。どうぞ今後とも変わらぬ叱咤激励を賜りますよう何卒宜しくお願い致します。



## 【学会動静】

### □大会予定

・第74回大会：[会期]2016/10/22,23 [会場]和倉温泉観光会館

### □新入会員の方々(2015/10～2016/3, 敬称略)

(学)古澤 孝行	武蔵野大学
(正)正 美智子	名古屋学芸大学
(学)田中 光	流通経済大学
(正)志村まゆら	健康科学大学
(正)青地 克頼	聖徳大学
(正)慶徳 民夫	山形県立保健医療大学
(学)立野 謙太	九州大学
(正)八木 崇行	宇野病院
(正)宮寺 亮輔	文京学院大学
(正)傳法谷郁乃	神奈川大学
(正)中西 朋子	共立女子大学
(正)村田 浩子	早稲田大学
(正)コウハクル ワサナ	福岡大学

**from Editors**

次号 No.3 の原稿締切は 2016 年 8 月 1 日です

▽今号から和文誌の印刷会社に変更になりました。実は、これまで和文誌と PANews は別個の印刷会社で印刷し、一旦、学会事務局に集めた後、同梱して配送するという複雑な手続きを経ていました。作業の簡素化と会計手続き上の利便性から、PANews の印刷も和文誌と同じ印刷会社に統一することになりましたので御報告させていただきます。

また、宮野道雄先生から「私の生理人類学」、江頭優佳博士から「学位取得記」、村木里志先生から「研究室紹介」を御寄稿頂きました。誠にありがとうございました。(安陪)

▽今号の目次、あるいは、冒頭のページ番号をご覧になって、「？」と思われた方はいらっしゃいませんか？ 8 ページから始まっています。実は今年の第 26 巻から本誌のページを通し番号とすることになりました。

本誌は ISSN 番号を有する定期刊行物ですので、掲載された記事は筆者の業績の「その他」などでカウントできます。地味な変化ですが、若手研究者に本誌を論文とはちょっと趣の異なる気楽な発表の場として利用いただければとの老婆心の現れとお考えください。(仲村)

▽ PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター

仲村 匡 司 京都大学大学院 農学研究科

メールアドレス [panews@jspa.net](mailto:panews@jspa.net)

※原稿、お問い合わせなどはこのメールアドレス宛にお送りください。